

日本人大学生の異文化間コミュニケーションスタイル ーアメリカ人・中国人との日本語会話における「情報要求」発話分析ー

佐々木由美

要旨

日本人大学生が日本語を使用し、日本人同士で会話する同文化内コミュニケーション場面と、アメリカ人・中国人と会話する異文化間コミュニケーション場面にそれぞれ出現する、日本人の「情報要求」発話頻度の差を分析することにより、各場面における日本人のコミュニケーションスタイルが異なるかどうかを検証した。その結果、異文化間コミュニケーション状況では日本人の「情報要求」発話頻度が増加する傾向にあることが明らかとなり、特に「会話展開」・「事実情報」・「意見・感想」機能の「情報要求」発話の増加が顕著であることがわかった。これらの結果から、日本人大学生の異文化間コミュニケーションスタイルの考察を試みた。

[キーワード] 「情報要求」発話・異文化間コミュニケーション・日本人の異文化間コミュニケーションスタイル

1. 異文化間コミュニケーション研究に含まれる問題

(1) 問題の所在

異文化間コミュニケーションには、同文化内コミュニケーションにはみられないさまざまな問題が含まれるが、以下の三点は特に重要だと思われる。

第一に相手文化に関する知識の問題がある。これは主に言語・非言語的コミュニケーションスタイルや社会文化的価値観・信条・生活習慣に関する知識を指す。こうした知識が欠如すると、相手のコミュニケーション行動を自文化の尺度でのみ測り、誤解に陥りやすい危険性があると考ええる。

第二に相手文化に対する態度の問題がある。これは相手文化に対するステレオタイプや偏見を指す。先に挙げた相手文化に関する知識が少ない程、ステレオタイプや偏見で「相手文化を理解している」と錯覚する傾向が強くなると思われる。そうしたステレオタイプや偏見がポジティブなものであろうと、ネガティブなものであろうと相手文化を歪めて判断する点では同次元であり、相手のメッセージを誤って解釈する危険性は高くなると考える。

第三にコミュニケーションスキルの問題がある。これは媒介言語が外国語

であれば習得レベルの問題も関連するが、ここでは媒介言語が外国語であろうと母語であろうと、先に指摘した二点を理解した上で、異文化間コミュニケーション状況を客観的に判断でき、それに対応できるスキルを指す。

(2) 先行研究とその問題点

以上の点が、異文化間コミュニケーション研究を進める上で明らかにされていく必要のある問題だと思われる。既にさまざまな分野で多くの研究が行われているが、それぞれに課題を残していると考える。

第一の問題に関して、コミュニケーション研究の分野で、日米間の社会文化的価値観やコミュニケーションスタイルの相違に関する数量的調査は多数行われている (Nomura & Barnlund, 1983; Barnlund & Araki, 1985; Neuliep & Hazleton, 1985; Barnlund & Yoshioka, 1990他)。また、社会言語学の分野で会話分析の手法を用い、文化間のコミュニケーションスタイルの相違を実証的に明らかにする研究も多い (Clancy, 1980; Tyler, 1992; Tannen, 1993; Watanabe, 1993 他)。しかし、これらの研究は各文化のコミュニケーションスタイルを比較対象し、両者の相違を指摘するに止まっており、そうした相違が異文化間コミュニケーションにどう影響するかについて実証的解明を試みるものではない。

第二の問題に関して、Hewston & Giles (1986) 他はステレオタイプや偏見が話者のコミュニケーション行動に影響することを指摘しており、van Dijk (1984) は偏見を持つ話者の会話を分析、カテゴリー化している。しかし、こうした態度が異文化間コミュニケーションにどう影響するかを実証的に明らかにした研究はほとんどみられない。

第三の問題に関連するものとして、第二言語習得研究の分野における negotiation of meaning の研究 (Varonis & Gass, 1985; Long & Porter, 1985 他) や、communication strategies の研究 (Faerch & Kasper, 1983; Bialystok, 1990他) が挙げられると思われる。しかし、これらは第二言語使用の話者を対象とするため、母語使用の場合も考えられる異文化間コミュニケーション研究への応用に十分だとは言い難い。

2. 研究概要

(1) 研究目的

本研究では、日本人の日本語使用によるアメリカ人・中国人との異文化間

コミュニケーション状況と、日本人同士の同文化内コミュニケーション状況では、「情報要求」発話の出現頻度が異なるかどうかを検証することを目的とする。このように、実際の異文化間コミュニケーション場面を検証することで既述した第一の問題に関する先行研究における課題を、また、日本人の母語使用による異文化間コミュニケーション場面を検証することで第三の問題に関する先行研究における課題を、それぞれ一步でも解消する方向へ運びたいと考える。

ここで「情報要求」発話に焦点を当てる理由として、次の二点を挙げたい。第一に、会話とは互いの情報を交換し合う相互活動であり、あらゆる形態の会話において、「情報要求」発話は頻繁に出現する可能性の高い発話の一つと考えるためである。次に、「情報要求」発話が単に相手の情報を収集するだけでなく、発話ターンの交代や話題転換の促進など、会話進行上、極めて重要な役割を果たす発話の一つと思われるためである。以上の理由から、「情報要求」発話は注目に値すると考える。但し、今回の研究では発話頻度の分析を試みるに止め、発話ターンの交代や話題転換の促進という会話進行上の役割については今後の課題としたい。

(2) 仮説

日本人の異文化間コミュニケーションスタイルの傾向を明らかにするために、日本人の「情報要求」（後に詳述）発話頻度の変化を分析するにあたり、以下の仮説をたてた。

日本人が日本人同士で会話する同文化内コミュニケーションと、アメリカ人・中国人と会話する異文化間コミュニケーションでは、日本人の「情報要求」発話頻度が異文化間コミュニケーションにおいて明らかに増加する。この点について検証を試みたい。

3. 「情報要求」発話と先行研究

(1) 「情報要求」発話の定義

Szatrowski(1993)は日本語の発話機能の一つとして「情報要求」機能を挙げ、それを「情報の提供を求める発話で質問の類が多い」と定義している。しかし、「質問」という語彙の使用が定義に曖昧性を残すと考え、本研究では以下のように定義し直す。即ち、「情報要求」発話とは「相手話者にあらゆる情報を要求するための発話全てを含むものとし、次の三点のいずれかの

条件を満たす必要がある。1) 形態が明らかに情報を要求する。2) 発話のコンテキストから明らかに情報を要求する機能を果たす。3) 音声（イントネーション）から明らかに情報を要求すると判断できる」ものである。

(2) 「情報要求」発話の機能分類研究：Questions の研究

「情報要求」発話の先行研究として、questions の研究がそれに該当すると思われる。本研究の「情報要求」発話の機能分類に際し、Kearsley(1976)とFreed(1994)の questions の分類研究を参考にした。従って、それらを「情報要求」発話の機能分類の先行研究として概観し、問題点を指摘したい。

Kearsley(1976)は、questions の形態・機能両方の分類化を試み、機能を、a) echoic（言い直し要求） b) epistemic（情報要求） c) expressive（態度表明） d) social control（談話調整）の4つに大別している。しかし、この機能分類は各カテゴリー内の下位分類化が不十分で抽象性が目立つ。

Kearsley(1976)の研究を踏まえ、Freed(1994)はアメリカ人ペアの英語会話のデータから question tokens を抽出し、これらが伝達する情報の性質を基準に機能分類化を試みている。しかし、この分類はあくまで英語データに基づくため、日本語会話にみられる「情報要求」機能と一致するとは考えにくく、本研究では修正を加えた。詳細は「6. 研究結果」で併せて述べる。

4. 調査概要

(1) 調査方法

各日本人被験者に日本人・アメリカ人・中国人男女各1名ずつ計6名とペアで20分間、話題を指定せずに日本語で会話してもらい、それをビデオ録画・テープ録音した。このように各文化圏の男女各1名ずつと対話してもらったのはデータへの「性差」の影響をできるだけ等しくするためである。また、「親しさ」の要因を排除するため、全員その場で初めて対面する状況にした。

(2) 被験者

被験者は、日本人男性4名／女性9名・アメリカ人（アングロサクソン系）・中国人（北京語／上海語圏）の男女各3名ずつ、計25名。年齢・社会的地位の相違による影響を小さくするため、大学学部生・院生を選んだ。また、中国人・アメリカ人学生の日本語能力は、日本語能力一級試験合格、或いはそれに相当するコミュニケーション能力を有することを基準とした。

(3) 分析データと分析方法

分析データは、日本人同士／日本人とアメリカ人／日本人と中国人の同性・異性のペア計51組による、各20分間の日本語会話17時間分である。これらの文字化資料から、前述の「情報要求」発話の三つの基準を満たすものを抽出し、各ケースの発話頻度を調べ、カイ二乗検定で統計処理を行った。

5. 日本語の「情報要求」発話の機能分類

「情報要求」発話の機能分類化にあたり、Freed(1994) の挙げる16の小カテゴリーの内、日本語データに観察されなかった3つを除外し、新たに観察された6つを加え、最終的に計19の小カテゴリーに分類した。更に、これらを Freed の分類にならない部分的に修正しながら、「会話展開」「表現スタイル」「事実情報」「意見・感想」の4つの大カテゴリーに大別した。「会話展開」「表現スタイル」カテゴリーは会話進行のためのテクニカルな側面を促進させる機能があり、「事実情報」「意見・感想」カテゴリーは話題や相手に関する情報を収集する機能がある（表1）。

〔表1：日本語の会話に観察される「情報要求」発話の機能分類〕

*印は新たに加えたもの。それ以外は Freed(1994)から引用。

会話進行のテクニカルな側面を促進させる機能	会話展開	相手のメッセージを理解する為の情報要求機能
会話進行のテクニカルな側面を促進させる機能	明確化	相手の話の内容をより明確化させる
	確認	相手の話の内容を確認する
	聞き返し	相手の言葉が聞き取れない場合に聞き返す
	*先取り確認	相手が話し終わらない内に先取りして内容を確認する
	表現スタイル	自分のメッセージを理解し易くする為の情報要求機能
	共有確認	自分が一度話した内容かどうかを相手に確認する
	理解確認	自分の話す内容を相手が理解しているかを確認する
	知識確認	自分が話す内容について相手の知識を確認する
	自問	自分自身へ問いかけながら発話する
	間接話法	第三者の情報要求の発話をそのまま引用する
	*言い換え	自分の質問内容を変えずに言い換える
	*否定言い換え	自分の質問内容を否定して言い換える
	*例示	自分の発話を例を示して言い換える
	*言語知識援助	自分の使用したい語彙に自信がない時、援助を要求
	事実情報	外界の事実を要求する機能
	個人情報	相手個人に関する情報を要求する
	一般情報	一般的事実に関する情報を要求する
	状況情報	その場の物理的状況に関する情報を要求する
	勧誘・要求	相手に提案・勧誘をしたり、許可などを要求する
話題や相手に関する機能	*意見・感想	相手に意見や感想を要求する機能
	意見	相手の意見を要求する
話題や相手に関する機能	*感想	相手の感想を要求する

6. 研究結果

(1) 日本人の「情報要求」発話頻度の変化（表2参照）

観察された日本人の「情報要求」発話総数は、対日本人で 633、対アメリカ人で 965、対中国人で999 で、異文化間コミュニケーションにおける「情報要求」発話頻度は明らかに増加し、同文化内コミュニケーションにおける発話頻度と有意差があるとわかった($p < .01$)。その内、「会話展開」（対アメリカ人= $p < .005$ ；対中国人= $p < .025$ ）、「事実情報」（対アメリカ人・中国人= $p < .005$ ）、「意見・感想」（対アメリカ人= $p < .025$ ；対中国人= $p < .005$ ）の三つの機能の発話頻度について、異文化間コミュニケーション状況において特に有意差がみられたが、「表現スタイル」機能の発話頻度に有意差はみられなかった。これらの結果から、前述の仮説は「表現スタイル」機能の発話を除いて支持されたことになる。

[表2：日本人の「情報要求」各機能の発話頻度とその割合(%) N=51ケース]

2大機能	会話のテクニカルな側面		話題や相手の情報収集		
機能 カテゴリー	会話展開	表現 スタイル	事実情報	意見・ 感想	TOTAL
対日本人	148 (23%)	90 (14%)	376 (60%)	19 (3%)	633 (100%)
対アメリカ人	* 299 (31%)	168 (17%)	* 443 (46%)	** 55 (6%)	* 965 (100%)
対中国人	** 285 (28%)	161 (16%)	* 494 (50%)	* 59 (6%)	* 999 (100%)

* $p < .005$

** $p < .025$

(2) 会話相手別「情報要求」発話頻度の各機能の占める割合 (表2 参照)

会話相手別に「情報要求」発話頻度の各機能の占める割合を、全発話総数を100%としてみると、どの相手の場合でも最も大きな割合を占めるのが「事実情報」機能の発話である。その傾向は、同文化内コミュニケーション、即ち日本人同士で顕著である (対日本人=60%, 対アメリカ人=46%, 対中国人=50%)。次に大きな割合を占めるのは「会話展開」機能の発話で、これは異文化間コミュニケーションの方でやや大きい。しかし、同文化内コミュニケーションとの差は顕著ではない (対日本人=23%, 対アメリカ人=28%, 対中国人=31%)。続いて割合の大きい機能は「表現スタイル」で、その割合は異文化間コミュニケーションと同文化内コミュニケーションで差がほとんど認められない (対日本人=14%, 対アメリカ人=17%, 対中国人=16%)。最後に、「意見・感想」機能の発話は、異文化間コミュニケーションにおいて占める割合が大きい (対日本人=3%, 対中国人=6%, 対アメリカ人=6%)。

7. 考察

(1) 「情報要求」発話総数の変化

日本人大学生の「情報要求」の総発話総数は、異文化間コミュニケーションにおいて増加する傾向があることがわかった (表2)。これは、異文化間コミュニケーションにおいて、「情報要求」発話を多用する日本人大学生のコミュニケーションスタイルが、同文化内コミュニケーションの場合よりも顕著になることを示唆するものと考えられないだろうか。

以下、四つの各機能カテゴリーにおける「情報要求」発話頻度の変化と、その要因を順に考察していき、そこから日本人大学生の異文化間コミュニケーションスタイルの傾向を探ってみたい。

(2) 「会話展開」機能の「情報要求」発話頻度の変化

「会話展開」機能の「情報要求」発話頻度は異文化間コミュニケーションで増加するとわかった (表2)。「会話展開」機能の発話とは、相手の発話が理解できなかったり聞き取れなかった場合に、確認や明確化を行うものである。これが異文化間コミュニケーション状況で増加する要因として以下の二点が挙げられるであろう。

まず第一に、アメリカ人や中国人にとり外国語である日本語を使用することが、日本人同士の場合よりも communication breakdown を引き起こし易

くする為だと思われる。そしてその都度、聞き返しや意味の明確化や確認といった「メッセージ理解のための相互交渉 (*negotiation of meaning*)」

(岡崎&岡崎:1990)が行われ、「会話展開」機能の発話による会話の調整がより多く必要になる為だと考える。これは、Varonis & Gass(1985)の知見と一致する。

次に、アメリカ人・中国人とは文化的背景が異なるゆえに、共有知識や体験が日本人同士の場合に比べ少ない為だと思われる。即ち、話題の中に実際の体験を伴わない話しの出現する割合が異文化間コミュニケーションでは多くなり、内容を理解する為に確認の必要性が高まるせいだと考える。

このことから、異文化間コミュニケーションにおいては「会話展開」機能の「情報要求」発話を多用するコミュニケーションスタイルが、同文化内コミュニケーションと比べて顕著になる傾向があるのではないかと考える。

(3) 「表現スタイル」機能の「情報要求」発話頻度の変化

「表現スタイル」機能の「情報要求」発話頻度について、同文化内コミュニケーションと異文化間コミュニケーションにおける有意差は認められなかった。即ち、これは両コミュニケーション状況における「表現スタイル」機能の発話頻度が著しく変化しなかったことを示唆する。「表現スタイル」は、話者が自分のメッセージを相手にわかり易く伝える為の情報を要求する発話である。この発話頻度の変化が両コミュニケーション状況において顕著でなかったということは、同文化内コミュニケーションでも相手が初対面の場合には、異文化間コミュニケーションの場合とほぼ同様の割合でコミュニケーションを円滑に理解し易く工夫する傾向があると考えられる。このことから、同文化圏の相手でも初対面である場合、異文化圏出身者と対話する場合と類似した傾向がコミュニケーションスタイルに現れる可能性があると思われる。

(4) 「事実情報」機能の「情報要求」発話頻度の変化

「事実情報」機能の「情報要求」発話頻度が、異文化間コミュニケーションで明らかに増加するとわかった。これは異文化間コミュニケーションにおいて、話題や相手に関する情報収集の傾向がより顕著になることを示唆するものと思われる。こうした傾向が異文化間コミュニケーション状況で強まる要因として以下の三点が考えられるのではなかろうか。

まず第一に、先の(1)「会話展開」の所でも述べたように、異なる文化背景を持つゆえに共有知識・体験の少ない、いわば stranger 度の高いアメリ

カ人・中国人から多くの情報を引き出すことにより、日本人が自分自身の緊張感や不安感を少しでも減少させようとする為だと思われる。つまり、相手をよく知り共通点を見出すことで、安心感を得ようとする傾向があるのではないだろうか。これは Gudykunst & Kim (1984) らの知見と一致する。

また、共有知識・体験の少ないアメリカ人・中国人との異文化間コミュニケーションでは、共通の話題を探すのが日本人の場合ほど容易でないことが推測される。従って、話題のきっかけを作るさまざまな情報を収集しようとする為に「事実情報」機能の発話が増加するのではないかと思われる。或いはまた、共有知識の欠如は一つの話題の継続を困難にさせるとも考えられ、日本人同士の場合ほど長く話題が続かない為、次の話題探しに必要な情報収集の頻度が高まるものと思われる。

また、母語話者である日本人が、非母語話者であるアメリカ人・中国人の会話参加を促す為に「事実情報」を要求すると考えられる。即ち、「事実情報」を要求することでアメリカ人・中国人に発話チャンスを与え、会話への参加を奨励する傾向があるのではなからうか。これは「言語的ホスト」の母語話者が、「言語的ゲスト」である非母語話者の会話参加を奨励する為、頻繁に発問する傾向があるとするファン(1995)の報告と一致する。

以上の考察から、異文化間コミュニケーションにおいては、同文化内コミュニケーション場面よりも、「事実情報」機能の発話が多用されるコミュニケーションスタイルの傾向があると考えられる。

一方で、同文化内コミュニケーションでの「情報要求」発話全体の内訳における「事実情報」機能の発話頻度の割合が大きいことから、日本人同士のコミュニケーションでも「事実情報」の要求にかなり集中する傾向があることが示唆されると思われる(表2)。従って、「事実情報」機能の発話は同文化内コミュニケーションでも、異文化間コミュニケーションでも、共に出現頻度の顕著な発話であると考えられるが、その度合が異文化間コミュニケーションでは更に顕著になると思われる。

(5) 「意見・感想」機能の「情報要求」発話頻度の変化

「意見・感想」機能の「情報要求」発話頻度も、異文化間コミュニケーションで明らかに増加するとわかった。「意見・感想」要求とは、相手に話題についての意見や感想を求める発話であり、会話進行上果たす役割については先の「事実情報」機能の発話と共通する点が多く、従って、(4)「事実情

報」で考察した見解がここにも該当すると考える。即ち、「意見・感想」機能の発話により、1. stranger度の高いアメリカ人や中国人から情報を引き出し相手をよく知ることで安心感を得ようとする為、2. 話題のきっかけをつかむ為、3. 相手の会話参加を奨励する為に、異文化間コミュニケーションにおいて発話頻度が増加すると思われる。しかも、相手の会話参加の奨励という点では、「事実情報」機能の発話よりも、「意見・感想」機能の発話の方が相手に複雑な思考による回答を要求する為、より長い発話権を与えることになり、その結果、会話の展開もより複雑化する場合があると思われる。

以上の考察から、異文化間コミュニケーションにおいては、同文化内コミュニケーションよりも、「意見・感想」機能の発話の多いコミュニケーションスタイルになる傾向があると考えられるのではなかろうか。

8. 今後の課題

日本人大学生の異文化間コミュニケーションスタイルについて、「情報要求」発話に焦点を当て実証的検証を試みたが、「日本人」と一般化するのに十分なデータとは思われない。従って、今後、更にデータを増やし、研究を続行する必要があると考える。また「情報要求」の全体の発話頻度のみを問題にするのではなく、時間経過と発話頻度との関係、話題内容と発話頻度との関係、また各機能の発話の会話展開上の役割についても検証していきたい。

参考文献

- Barnlund, D. & Yoshioka, M. 1990. Apologies: Japanese and American styles. International journal of intercultural relations, 14:193-206
- Barnlund, D. & Araki, S. 1985. Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. Journal of cross-cultural psychology, 16: 9-26.
- Bialystok, E. 1990. Communication strategies. Basil Blackwell.
- Clancy, P. 1980. Referential choice in English and Japanese narrative discourse. In W. Chafe (Ed.), The pear stories-cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production: 127-202. Ablex.
- Faerch, C. & Kasper, G. 1983. Strategies in interlanguage communication. Longman.

- フアン, K. S. 1995. 「相手言語接触場面と第三者言語接触場面における言語管理と会話参加」 第5回第二言語習得合同研究発表論文
- Freed, A. 1994. The form and function of questions in informal dyadic conversation. Journal of Pragmatics. 21: 621-644.
- Gudykunst, W., & Young, K. 1984. Communicating with strangers. Random House.
- Hewstone, M. & Giles, H. 1986. Stereotypes and intergroup communication. In W. Gudykunst (Ed.) Intergroup communication. Edward Arnold.
- Kearsley, G. 1976. Questions and question-asking in verbal discourse :A cross-disiplinary review. Journal of Psycholinguistic Research. Vol. 5 (4): 355-375.
- Long, M. & Porter, P. 1985. Group work, interlanguage talk, and second language acquisition. TESOL Quarterly. 19: 207-228.
- Neuliep, W. & Hazleton, V. 1985. A corss-cultural comparison of Japanese and American persuasive strategy selection. International journal of intercultural relations. 9: 389-404.
- Nomura, N. & Barnlund, D. 1983. Patterns of interpersonal criticism in Japan and United States. International journal intercultural relations. 7: 1-18.
- 岡崎敏雄・岡崎眸 1990. 「日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ」 凡人社
- Szatrowski, P. 1993. 「日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察」 くろし出版
- Tannen, D. 1993. What's in a frame? Surface evidence for underlying expectations. In D. Tannen (Ed.), Framing in discourse: 14-56, Oxford
- Tyler, A. 1992. Discourse structure and specification of relationships: A cross-linguistic analysis. Text. 12(1):1-18.
- van Dijk, T. 1984. Prejudice in discourse. Benjamins.
- Varonis, E. M. & Gass, S. 1985. Non-native/non-native conversations: A model for negotiation of meaning. Applied Linguistics. Vol. 6, No. 1, 71-90.
- Watanabe, S. 1993. Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. In D. Tannen (Ed.), Framing in Discourse: 176-209, Oxford.

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻)